

山田秀三文庫の整理作業 その2

今回は、現在整理中の「山田秀三文庫」の映像資料・写真資料・音声資料について中間報告します。

《映像資料》

「山田秀三文庫」映像資料には、8ミリフィルム33本とVHSビデオテープ（ただし現在のようなカセットになっていないもの）1本があります。今回は8ミリフィルムについて報告します。

8ミリフィルムはHi8（ハイエイト）ビデオテープへ複写しました。

フィルムのケースには山田秀三氏の筆跡で簡単に内容が記されています。内容は大きく国内のものと外遊時のものとに分かれます。国内12本、外遊時のもの20本、不明なもの1本となっています。

録画年代のはっきり分かるものの中では、平取町二風谷での録画を除いて戦前に撮影されたものばかりです。

ビデオカメラの普及した現在とは違って、個人でこうした録画機器を所有していたことは当時かなり珍しかったのではないかと思います。それだけに、映画や公的な記録ではなく、個人的な視点で撮影された当時の国内外の光景として貴重な記録です。

二風谷での映像は昭和38年4月の撮影で、音声はついていないカラーフィルムです。編集されたものらしく、山田氏の筆跡による「アイヌ伝承 カムイノミと踊り」のタイトルに始まり、各場面ごとにやはり同じ筆跡での13の小タイトル（餅つき・ヌササン・カムイノミ・タブカル・サケハウ・ヤイサマ・ユウカラ・踊り・ハラルキ・ホリッパ・ホリッパ相

の手・チャッピーヤッ・宴果てて）とその解説文が入ります。イラストもいくつか描かれています。



「カムイノミ」より



「ハラルキ」より

「踊り」の場面に先立って挿入されている解説文を紹介しましょう。

「とうとう踊りが始まった。アイヌの踊りはショーではない。只見ていたってつまらない。だが其の空気の中に入って楽しむとやっぱりうっとりとなる。其れが宴と云うものらしい。」

フィルムの中には、輪踊りの輪に加わり、正装して刀を持つ男性の横で、その身ぶりを少しまねてから照れくさそうに笑う山田氏の姿も収まっています。この「宴」のひとつときを楽しんだであろうことが、文面からも画面からもうかがわれるようです。

（甲地）

《写真資料》

前号で写真資料はダンボール5箱のうち3箱まで大まかな整理作業が進んだことを報告しました。その後、残りのダンボール2箱も作業が終了しましたので報告いたします。

地名に関する写真資料として寄贈されたものは、白黒写真ではネガフィルム約300本（4,000コマ）、焼き付け写真は約2,900枚、カラー写真ではネガフィルム約330本（8,500コマ、スライドフィルムを含む）、焼き付け写真約3,100枚でした。コマ数合計で約12,500ありました。

焼き付け写真はフィールドノートや印刷物に使用したために全部はそろっていませんが、調査に同行した人や、現地で会った人との記念撮影的な写真は人数分以上に焼き増しがあったりしますが、それでも、コマ数に対しての焼き付け写真の量は少ないです。

今後は、ダンボール50箱にもなる書き込みのある地図、フィールドノートや著作などとの関連が重要になりますので、地図類の整理作業と平行して、1コマ毎の記録を作ります。

最終的には、全ての資料を関連づけ山田秀三氏のアイヌ語地名研究のデータベースを作り上げるという、もっとも時間のかかる作業にとりかかります。

（古原）

《音声資料》

カセットテープ、オープンリールテープ、SPレコードの三種類を音声資料として扱っています。

1960年代のテープ類は劣化している可能性もあり、慎重な整理作業が求められます。まず、資料の傷み具合を見ながら清掃をおこない、次に、アイヌ文化に関連した音声資料から、デジタルオーディオテープ（DAT）へ複写します。

その後、複写テープから内容を聞くことになりましたので、本格的な作業は資料の受け入れから半年を経過してからになりました。

SPレコードは、残念ながら今のところ再生できる機械が当センターにありませんので、清掃と登録を先に進めています。

中間報告として、各音声資料の概要をお知らせしたいと思います。

1. カセットテープ

カセットテープは全部で103本あります。アイヌ文化に関連したものが約50本あり、その中にはアイヌ語学者金田一京助が山田氏に対して、数々の思い出を語っているテープもあります。他に、民謡や小唄を吹き込んだものが約40本、ラジオやテレビから録音しているものも数点含まれています。

整理作業は、調査年月日、調査地、情報提供者、調査者、録音時間などの項目にそって、テープ本体や箱に調査者自身が記入した記録から登録します。

現在、実際の録音内容と照らし合わせながらインデックスの作成を続けているところです。アイヌ文化に関連したテープについては、ノートへのメモが終わり、コンピューターへ入力しているところです。将来は、会話の一部始終を文字に起こすことも必要になると考えています。

『沙流川下流』と記入されているテープが9本あり、「聞く地名百科事典」とも言えるほど、アイヌ語地名の話題が詰め込まれています。これは、ただ単に語り手の知識量が豊富だったからというだけではなく、それを引き出した調査者の“予習”のすごさを物語っていると思います。山田氏が新情報を得て発する喜びの声は、語り手の「語る喜び」にもつながっているように感じられます。

（大谷）

2. オープンリールテープ

このテープで心配だったのは、B面の音がA面に移る現象だったのですが、幸いなことに音自体は良好です。整理作業の工程は、基本的にカセットテープと変わりがありません。しかし、こちらの方が清掃作業に時間がかかりました。

合計94本のうち、アイヌ文化に関連しているテープ43本の複写作業は終了しています。現在、内容をしっかり聞き取り、インデックスをつける作業を続けています。

ここにも、1960年代に採録した民謡が29本あります。「ソーラン節」「石狩はおい」「鯉漁場の歌」など、アイヌ文化だけでなく日本民謡の研究にとっても貴重な資料になるかもしれません。

採録年月日の判明しているものをみると、最初に採録した1960年の「追分節」から始まり、1974年のものまであります。アイヌ文化に関して録音されている時期は、1963年から1968年の間に限られていますが、地名調査が全く収められていないので不思議な気がします。採録してある主なものは、アイヌの唄や踊り、アイヌ語会話などです。

実際に捕獲した熊を「ホプニレ（魂送り）」させる様子や、情報提供者たちからの挨拶が「声の手紙」として録音してあるテープなど、山田氏に聞いてもらうことを目的に録音されて送られたものもあります。（大谷）

3. SPレコード

山田秀三文庫には280枚余りのSPレコードがあり、現在約3分の2を登録済みです。LPに比べずっしりと重いレコード盤は、どれも当時の薄手のジャケットにむき出しで入っています。袋の底が破れたものも混じっていますし、材質もLPよりも割れやすいものですから運ぶときにはとくに気を遣います。

SPのコレクションとは対照的に今のところLP

レコードは見あたりません。

圧倒的に多いのは外国盤のクラシック音楽のレコードです。カザルス、コルトー、パデレフスキ、クライスラー、カルーソー等々、クラシック音楽の往年の名演奏家達の名が連なります。作曲家のサン＝サーンスやラヴェルの自作自演もあります。有名人の演奏はCD等で復刻されたものもありますが、モノラルのアナログ盤のやわらかな音色そのものが懐かしいという方々には興味深いコレクションかと思われます。

クラシック音楽以外では、戦前の日本の歌謡曲や民謡、小唄などが多く、他にヨーデルやフラメンコ音楽、チャルダッシュ（ハンガリーの民俗音楽の一つ）などがあります。

今のライナーノーツ（付属解説書）のようなものではなく、歌詞カードも付いていないものがほとんどですが、たまにジャケットの中に山田氏の筆跡で書き込みのある紙片などが見つかります。また、1930～40年代に喜劇俳優として大活躍した故・古川ロッパ（緑波）氏が描いた似顔絵が入っていたりなど、思いがけず楽しい資料に出会うことがあります。

（甲地）



◀ジャケットに描かれた古川ロッパ氏筆のイラスト



古川ロッパ氏筆▶
山田氏の似顔絵

アイヌ文化紹介パンフレットを刊行します

当センターでは、「世界の先住民の国際10年」の取り組みとして、アイヌ文化を紹介するパンフレット（小冊子）を作成することに致しました。

このパンフレットは、アイヌ文化についての理解を深めていただくとともに、アイヌ文化に関心をお持ちの方々にとっての手引きともなるよう、様々なテーマごとに毎年1冊ずつ、今後10年間に渡って刊行するものです。

現在予定している各集の内容（仮題）は次のとおりです。テーマとその内容は、センターに寄せられる質問や問い合わせなども参考にして、前半の5冊にはなるべく基本的な内容のものや関心の高いものを、後半の5冊にはそれらをふまえてやや踏み込んだ内容のものを考えています。

- 1 （はなす）言語
- 2 （よそおう）衣
- 3 （たべる）食
- 4 （すむ）住
- 5 （いのる）信仰・儀礼
- 6 （かたる）口承文芸
- 7 （うたう・おどる）芸能
- 8 （えものをとる・めぐみをいただく）
狩猟・採集・農耕
- 9 （わざをふるう）伝統工芸
- 10 （あゆむ）歴史

各集とも、伝統的な文化についての解説から現代の復興・伝承活動の動きまでを視野におさめた内容構成のもと、アイヌ文化に対してよく寄せられる疑問や一般に抱かれがちな誤解などにも留意し、また地域ごとの違いや特徴についても目配りのきいたものにしていきたいと考えております。

アイヌ語をテーマに据えた第1集は現在作成中で、本年末に刊行の予定です。

'95年度前半の動きと今後の予定

〔4月〕

- ・北海道開拓記念館テーマ展示「明治年間の虻田とアイヌの人々」（協力：小川）

〔6月〕

- ・日本口承文芸学会大会（報告：大谷）
- ・幕別町蝦夷考古館文書資料調査（'97年度まで継続）（協力：小川）

〔7月〕

- ・平成7年度第1回運営協議会
- ・共同研究「アイヌ文化の形成と変容」第1回研究会（参加：古原）
- ・北海道・東北史研究会「北海道・東北史研究の現状と課題」（報告：小川）
- ・共同研究「在ペテルスブルク博物館アイヌ資料の民族学的研究」（参加：古原）

〔8月〕

- ・北海道総務部知事室国際交流課「「語学指導等を行う外国青年招致事業」に係る日本語研修」講義（講師：澤井）
- ・北海道自治研修所「市町村職員研修」講義（講師：大谷）

このほか、研究課では「山田秀三文庫」の整理作業や現地調査などを昨年度に引き続きおこなっています。

なお、10月以降に実施される事業としては、次のようなものを予定しております。

- ・アイヌ文化紹介パンフレット第1集発行（12月）
- ・「山田秀三文庫」文献目録発行（'96年2月）
- ・『研究紀要』第2号発行（'96年3月）
- ・『センターだより』第4号発行（'96年3月）
- ・アイヌ文化講演会（場所・期日・講演者など検討中）

ネコン アイセ 〈何と呼ぼうか〉

奥 田 統 己

アイヌ語を学び、教えていると、ときどき「～の名前をアイヌ語でつけたいので教えてほしい」といわれることがある。こういった要望にはどう対応すればよいだろうか。アイヌ語の普及の一つになるという積極的な受けとめかたもあろう。しかし、その場ではとりあえず名前をつけることができても、あとあとその言葉がアイヌ語として使いづらくなるおそれがある。またアイヌ語をいわば飾りとして使われることのないようにしなければならない。

* * *

たとえば以前には「ホテルの1号室、2号室、という呼び名にアイヌ語を併用したいが何というのか」という問い合わせがあった。「室」はとりあえず「トゥンプ」とするとして「1号、2号」はどうすればよいだろうか。「シネ・トゥンプ、トゥ・トゥンプ（1・室、2・室）」でいいじゃないか、と思われるかもしれない。しかしこの表現をアイヌ語の文章のなかに置いてみると「ひと部屋、ふた部屋」という意味になってしまう。つまり「2号室」ひと部屋を頼んだつもりが「ふた部屋」用意されてしまったということになりかねない。

実はこの要望にきちんと答えるためには、まずアイヌ語の基本的なしかもなかなか難しい大問題を解決しなければならないのである。それは「第1の、第2の」という順序の数をどう表せばアイヌ語としておさまりがいいのかということである。これは短い表現であれこれ考えてもだめで、まとまった文脈のなかでうまく使えるようでないとならない。

アイヌの文化や歴史に直接関わって、書籍などの名にアイヌ語が使われることがある。昨年開かれた展覧会にも「ピッカノカ」という名前がつけられた。正直にいうとこの命名がどうも気になっている。こ

のアイヌ語は「美しい・文様」の訳なのだが、実は「ノカ」というアイヌ語と「文様」という日本語とは少なからず意味がずれているようなのである。同様の展示が大阪で行われたときの図録の巻頭の言葉に萱野茂氏による見事なアイヌ語訳が付されているが、そこでは「文様」にあたるアイヌ語として「ノカ」ではなく「シリキ」という言葉が使われている。「ノカ」という言葉の用例をいろいろ見てみると、どうも「文様」ではなく「何かをかたどって模したもの」というのが本来の意味らしいのである。「うろこ文様」のことを「ラムラムノカ」と呼ぶではないか、と言われるかもしれない。しかしこれもむしろ「うろこの・かたどって模したもの」というのが本来の意味だと考えられる。そうすると、展覧会の名前や図録の標題として単独で使われたときには気づかなくても、長い文章のなかで使われると「何かをかたどったのだろう」と読み手を戸惑わせる可能性もある。あるいは「着物の文様」のつもりで「チカカッペ・ノカ」などとしても、ひょっとすると「着物の型紙」のことになってしまうかもしれない。

* * *

アイヌ語を研究しているのなら自分の書く論文などのせめて標題くらいはアイヌ語に訳すべきだ、といわれることがある。もちろん、将来は標題だけでなく本文全体もアイヌ語で、との思いはあるし、以前試みに数ページの短い論文をアイヌ語で書いたこともある。そのときの経験から考えても、今はまだ書き手が力不足だけれど、将来アイヌ語によって学術論文が書かれるということは決して夢ではない。

では標題だけなら今すぐ何とかできるかというと、実はそれがかえって難しいのである。上で述べたように、短い言葉や表現を的確にアイヌ語に訳することは、まとまった文章の中でその言葉などを使いこなす力がついてからはじめて可能になるからだ。また日本語で文章を書くときも、目次や目録などで独り歩きをするものだけに、ぴったりの標題をつける

のに本文全体を書くのと同じくらいの苦心をした経験をお持ちの人はいるだろう。「せめて標題くらい」というのでは、そのアイヌ語が標題としての本来の役割を果たさず、飾りにしかならないおそれもある。それではかえってアイヌ語が軽んじられることになる。

* * *

繰り返すが、アイヌ語で論文を書く必要がないとか、アイヌ語を現代生活に生かす必要がないということではない。これからさらに勉強と工夫を重ねて行かなければならない。

ネシコイナウ (クルミの木のイナウ)

貝 澤 太 一

8月、沙流川流域で植物のアイヌ語名の聞き取り調査をしたとき、クルミの木の使い方の話を聞いた。

「クルミの木はネシコって言って、それで作ったのがネシコイナウと言うんだ。同じイナウでもヤナギやミズキで作ったイナウと違う。ネシコイナウって言うのは、やっぱり良い神様でない、悪い者にイナウやるときに使うんだ。」

私は思った。「悪い者ってなんだろう？」

そして先日、これに答えてもらえる機会ができた。

昔の人は、熊の中でも最も悪い熊をヌプリ ケシプリ ウェンクル（山・端・ふり・悪い者）と言っていて、その熊を捕らえたとき、たとえそれがどんな悪い熊であってもカムイノミをして、神の国に帰してあげた。でも、このときにあたりまえのイナウは使えないから、クルミの木で作ったネシコイナウを使う。また、人間には蛇などの神様が憑いていて、いつも健康を守ってくれている。でもその神様が、ときどきわるさして人間の具合を悪くしたりする。その神様に、わるさを止めるようになだめるときもネシコイナウを使うのだと教えてくれた。

イナウを作る木としては「ヤナギ」や「ミズキ」が有名だけど、「クルミ」や「キハダ」でもイナウは作られていた。必要に応じて使う木を変えていたアイヌは、それぞれの木をどんなふうにとらえていたのか。たとえば「優しい木」だとか「おしゃべりな木」だとか言われる木があるように。そんなことについて聞き取りを始めている。

お知らせ ~センターの刊行物は購入していただくことができます~

当センターの研究紀要は、関係機関・団体等にだけ送付しておりますが、道による刊行物の有償頒布制度にもとづき、道総務部文書課の行政情報センターにて実費に手数料を加えた額で販売しております。

現在販売しておりますのは『研究紀要』第1号のみですが、今後発行予定の研究紀要、資料目録なども、順次同じように取り扱う予定です。

・販売場所 北海道行政情報センター
(道庁別館3階)

(TEL231-4111(内22-389)または241-7979)

・価 格 『研究紀要』第1号 2,070円

編集後記

研究紀要とニュースレターに加え、今年度からはアイヌ文化紹介パンフレット、「山田秀三文庫」資料目録と、刊行物が増えます。ニュースレター紙上でも随時お知らせしていきます。いろいろなご意見・ご要望・お問い合わせに対し、少しずつでも「確実に」対応していきたいと思ひます。

編集・発行 **北海道立アイヌ民族文化研究センター**

〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階

Tel 011-272-8801(代) Fax 011-272-8850

開館/月~金 9:00~17:00 休館/土・日・祝